

【学園研 B】

1. 研究課題名

父性の発達が夫婦関係に及ぼす影響についての探索的研究

2. 研究代表者名

所属学部： 人間関係学部 職名： 講師 氏名：井上まり子

3. 研究分担者

所属： 職名 氏名

所属： 職名 氏名

所属： 職名 氏名

4. 研究成果の概要（1, 200字程度で記入。ただし、図・グラフは使わないこと）

【目的】

母親は子どもを妊娠したことにより、生理的な変化や身体的変化を経験し、約10ヶ月をかけて子どもの誕生を迎えるわけであるが、父親はいつ「親」になることを自覚し、その意識を発達させていくのか。子の誕生により新たに生じた養育という役割の取得や分担、およびそれまで夫婦がもっていた既存の役割と新たな役割間の調整が必要となるが、その変化は夫婦関係にどのような影響を及ぼすのかについて、主に父親に焦点を当て探索的に検討することを目的とする。

【方法】

- (1) 調査対象者：1歳以下の第一子をもつ夫婦2組。
- (2) 調査方法：質問紙調査法および個別面接調査法
- (3) 調査内容：以下①～③は質問紙調査、④～⑥は面接調査によりデータを収集した。なお、③については父親のみに回答を依頼した。
 - ① 夫婦関係尺度：小野寺（2005）を参照し、夫婦間で差がみられた10項目を選定し、さらに愛情関係を測定するための2項目を追加した計12項目に対して4件法による回答を求めた。何れの項目も3時点（妊娠中、生後半年後、現在）についての評定を依頼した。
 - ② 子どもと育児に対する感情：柏木・若松（1994）により作成された尺度で、子ども・育児に関する感情・態度について、肯定的・否定的側面から測定することのできる14項目により構成されている。新たにこれに「子どもにいらいらさせられることがよくあると思う」「子どもと気が合うと感じる」という2項目を追加し、計16項目に対して4件法による回答を求めた。
 - ③ 父親の家事・育児参加度：乳児がいる家庭で一般的であると思われる家事・育児行動5項目について、父親が実際にどの程度参加しているかを「毎日」「週2~3回」「週末のみ」「たまに」「全くしない」の頻度による5選択肢を設け回答を求めた。
 - ④ 妊娠期から現在に至るまでの子ども、じぶん、配偶者に対する感情の変化
 - ⑤ 夫婦関係の変化の捉え方
 - ⑥ 子育ての現状、理想など

【結果と考察】

(1) 調査協力者の属性

夫婦A：父親32歳会社員，母親32歳会社員（育児休暇取得中），長女10ヶ月。

夫婦B：父親32歳会社員，母親28歳専業主婦，長女1歳1ヶ月。

(2) 父性の芽生えと夫婦関係

夫婦AとBでは親としての自己を認識した時期に違いが見られた。Aは妻の産後1ヶ月頃であるのに対し、Bは妊娠中期から既に父親であるとの認識をもっていた。現在の夫婦関係をみると、夫婦Aでは特に妻側の夫に対する満足度の低下がみられ、夫の行動改善を願っているが、夫婦Bはお互

いを尊重し、夫は妻への労りの気持ちを意識的に表現するよう心がけ、家族と過ごす時間を積極的に作ろうと努力していた。よってBの妻は夫に対する親密度、愛情共に妊娠中と変わらぬ高さを維持していると思われる。Aの夫は妻を労っているつもりではあるが、それが実際に妻側には届いておらず、認識の違いが生じている。今回の2ケースでは、父性の芽生えた時期の早さとその後の夫婦関係の良好さに関連があるようみえるが、本研究から断定はできない。現在の夫婦関係の良好さを規定するものとしては、夫婦が同じ方向を向くこと、お互いの気持ちを理解し共有することが示唆された。

(3) 子ども・育児に対する感情と夫婦関係

何れの夫婦も育児に対しては、「制約感」と「分身感」よりも「肯定感」を強くもっていた。二つの夫婦を比較してみると、夫妻ともにBの方が「肯定感」が高い。またいずれの夫婦も夫よりも妻の方が「肯定感」が高かった。「分身感」は、一般には妻よりも夫の方が高いと言われているが、夫婦Bは妻の方が高い値を示している。これは学歴と実際に育児に携わっている程度が自分の子どもを分身として捉えるかどうかと関連するとした先行研究の結果と一致する(柏木・若松, 1994)。つまり、Bの妻は他の3名より学歴が低く、またBの夫の家事育児参加度が高いこととの関連を意味するものである。

(4) 父親の家事・育児参加度と夫婦関係

Aの夫は8ポイント、Bの夫は18ポイントと10ポイントの開きが見られた。Bの夫は特に育児への参加度が高く、積極的に子育てに携わろうとする姿勢がみられる。面接調査においても、Bの妻は夫が協力的であることを評価し、お互いがお互いを労う良好な夫婦関係が築けていると語られた。

(5) まとめと今後の課題

夫が父親であるとの自覚を持ち、子育てに実際に関与し、育児を肯定的に捉えること、また、子育ての中心的役割を担っている妻を労い、その気持ちを言語化し相手に伝えること、自分の趣味などのためにひとりで外出する時間を減らすという目に見える行動を取ることが、育児期にある夫婦関係の安定をもたらす要因であると思われる。しかし、それが父性の芽生えや発達とどのような関連があるのかを断定することはできなかった。

また今回は、既に第一子をもつ夫婦を対象に、一時点での回顧法を含めたデータ収集を行ったため、実際の感情を反映していたと言い切ることはできない。対象年齢も、生後1年ではまだ夫婦関係の調整中である可能性も高く、今後はやはり複数の夫婦を対象に妊娠期から数年間、縦断的な調査を行う必要がある。

【引用文献】

柏木恵子・若松素子(1994)。「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する
試み 発達心理学研究, 5(1), 72-83.

小野寺敦子(2005)。「親になること」にともなう夫婦関係の変化 発達心理学研究, 16(1), 15-25.